

# ドイツ告白教会闘争と伝道者養成

朝 岡 勝

はじめに<sup>1</sup>

いつの時代にも、教会にとって次代を担う伝道者養成は大切な課題である。東京基督神学校がその六十年に及ぶ歴史を閉じ、新たに東京基督教大学教会教職課程（神学科教会教職専攻）および大学院にその伝統を引き継ぐとするこの時、あらためて伝道者養成の一つのモデルを、かつて第二次大戦時のナチ・ドイツにおいて主イエス・キリストのみに従う信仰の決断をもって立ったドイツ告白教会闘争の姿を通して考えてみたい。<sup>2</sup>

## 第一章 告白教会と牧師補研修所

### 一、近世ドイツの一般的神学教育

一九世紀から二〇世紀初頭のドイツのプロテスタント教会では、一般的に牧師を目指す者は大学神学部で神学諸科の課程を修了した後、第一次試験を受けて牧師補となり、その後に各領邦教会の監督指導のもとに各個教会に派遣され、およそ六ヶ月から一年にわたる実習奉仕に従事した後、さらに六ヶ月から十ヶ月にわたって、各領邦教会が有していた「牧師補研修所」(Predigerseminar)で共同生活をしながら集中的な神学の学びの仕上げと実践的な訓練を受けるようになっていた。

牧師補研修所で学ぶ内容は主に実践神学部門に関わるもので、説教演習、牧会や訪問の仕方、祈りの導き方、聖礼典執行の所作、各種の冠婚葬祭の司式などが指導され、この研修期間の後に第二次試験を受け、按手を授けられて正式に牧師として赴任するようになっていたのである。

## 二、告白教会と神学教育

一九三〇年代になり、ナチ党支配の時代が訪れると、ヒトラーの意向を踏まえて成立した「帝国教会」(Reichskirche)とその主たる構成員となったドイツ・キリスト者たちが大学神学部的主流派となり、告白教会に立つ教授たちは追放、左遷され、従来の牧師研修所も帝国教会の管理下に置かれるようになっていった。そのような中でこれに対抗して組織された告白教会は、自らの手で牧師養成のための神学教育機関を設置するように動き始めたが、その最初の動きは一九三四年五月末にラインラントのバルメン・ゲマルケ教会を会場に開かれた第一回全国告白教会会議であった。この会議では有名な「バルメン宣言」が採択された他、告白教会の指導的役割を担う評議会の設置や教会の経済のこと、そして教職養成に関する議題も審議され、「告白会議はドイツ的キリスト者の教会統治局による補助説教者や牧師補のすべての内的外的な圧力に対して抗議する。そして告白教会評議員会に、若い神学徒への精神的な配慮と個人的な世話を委託する」という

決議がなされたのである。

さらに一九三四年一〇月、ベルリンのダーレムで開かれた第二回全国告白教会会議においては、帝国教会から分離独立した独自の教会指導機関としての「一時的指導委員会」を立て、帝国教会の教会憲法に違反することになったとしても聖書と信仰告白に則って行動し、帝国教会からの指示、通達に対しては拒否、不服従の姿勢を貫く「緊急権」の確立を確認した。これによって告白教会は牧師の教育から按手に至る牧師養成の責任を主体的に担うこととなった。M・ガイガーは次のように言う。「牧師の養成には特別な注意が払われた。諸大学の神学部が国家によって統制され、国家に依存していたので、教会の牧師研修所やその他の独立の養成機関が復活され、そこにおいて神学教育を修了し得ることとなった。独自の教師試験局があって牧師職候補者たちの教育状態を監督した。評議員会は、新しい牧師たちの就任式と叙任を規制し、神学の再教育の配慮をした。∴教会や神学の後継者を求めるこのような努力は、告白教会のころになされたもっとも重要なことの一つである。∴国家によって、まず最初は圧迫され、ついで禁止されつつ、教職の養成制度、試験制度のすべては、次第に、〈地下に潜る〉ねばならなかった。そしてついには、非常に大きな個人的危険をおかしてのみ保持されるという状態となったのである」。

### 三、牧師補研修所の設置

大学神学部が帝国教会の支配下に置かれたのに対抗し、告白教会はベルリン神学校（ルター派・現在のベルリン神学大学）、エルバーフェルト神学校（改革派・現在のヴッパータール神学大学）という教会立神学校を設置したが、両校は一九三五年一月一日の開設と同時にゲシュタポによって強制閉鎖させられてしまう。そのような状況下で、告白教会に連なる諸教会の中でも自らの立場を最も鮮明に示し、それゆえに最も

激しく帝国教会の圧迫を受けたドイツ最大の州教会である古プロイセン合同教会（ルター派と改革派の合同教派）は、非合法ながら独自に五つの牧師補研修所を設置した。

全体の責任者にはウィルヘルム・ニーゼルが任じられ、一九三四年十一月、ビーレフェルトにオットー・シュミッツ、翌一九三五年、エルバーフェルトにヘルマン・ヘッセ、ナウムブルクにゲルハルト・クレীগ、ブレスタウにハンス・ヨアヒム・イーヴァント、フィンケンヴァルデにディートリヒ・ボンヘッファーがそれぞれ所長として立てられた。諸教会も献金をもって支援し、大学を追われた優秀な神学者たちも貧しい研究環境と待遇にもかかわらず、個人の私財や蔵書などを持ち込んでこの働きに情熱を注いだ。しかしながら、この働きもナチの圧迫の下で様々な迫害を受けて次々に閉鎖に追い込まれ、困難な道を辿ることになったのである。

以上のような経緯から、實際上告白教会の牧師補研修所が当時の教会の教職養成にどれだけ寄与できたのかを正當に評価するのは困難なことであるが、しかしそこで生み出された神学と実践の記録は、「教会に仕える学」という本来の意味での神学として今でも我々に大きな影響を残している。そこで次章以下では牧師補研修所で奉仕した二人の神学者、ディートリヒ・ボンヘッファーとハンス・ヨアヒム・イーヴァントを取り上げて、その姿から学んでみたい。

## 第二章 ディートリヒ・ボンヘッファーの場合

### 一、ボンヘッファーとフィンケンヴァルデ牧師補研修所

まず最初に、この時代を代表する神学者の一人、ディートリヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer)

を取り上げる。ボンヘッファーは一九〇六年、プレスラウ（現在のポーランド領プロツラフ）に八人兄弟の六番目として生まれた。若い頃から優れた才能の持ち主であった彼は、チュービンゲン、ベルリンに学び、わずか二一歳で神学博士号を取得する。その後、牧師補としてスペイン、バルセロナのドイツ人教会で一年あまり奉仕した後にベルリンに戻り、二四歳にして神学教授の資格を取得し、ベルリン大学神学部講師として、神学者としての歩みを始めたのである。

その後、ヒトラーが政権を取ると直ちにナチ批判の論陣を張って告白教会闘争に加わる。やがてロンドンのドイツ人教会の牧師として奉仕していたボンヘッファーは、告白教会の求めに応じてドイツに戻り、一九三五年四月二六日にドイツ北部のツィンクストホーフの小さな家で研修所長としての奉仕を開始する。二九歳の若い所長と、その下に集まった二三名の若き牧師補たちで始まった研修所は、六月二四日からフィンケンヴァルデに場所を落ち着かせ、以後一九三七年九月末にゲシュタポによって閉鎖されるまでの約二年半、さらには場所を転々としながら非法法に続けて一九四〇年三月に完全に閉鎖させられるまで続けられ、一〇〇名以上の若い牧師補たちが訓練を受けて各地の告白教会の牧師として遣わされていた。この間にボンヘッファーが行った講義や演習がもとになって、『服従』(Nachfolge)、『倫理』(Ethik)といった教義学的著作をはじめ、説教や牧会学の学生による講義ノートが後に出版されたのはよく知られる通りであろう。その後、教え子たちの多くがナチによって逮捕投獄されたり、戦場で命を落としていく中で、ボンヘッファー自身も一九三九年には投獄を何とか免れさせようとした周囲の人びとの取り計らいでアメリカに亡命するものの、祖国で苦しむ人びととの連帯の道を選び取って数ヶ月で再びドイツに戻って来ると、講演や出版活動が禁止され、所在地を絶えず警察に申告する義務を負わされるようになる。この頃からボンヘッファーはナチ政権の悪魔的性格に対して実力行使の必要を感じるようになり、義兄を通じて国防軍諜報部に

加わり、ヒトラー暗殺計画に参加する一方、国を超えた教会的人脈を駆使して和平を模索していくようになる。しかし一九四三年三月にヒトラー暗殺計画が失敗に終わり、同年四月に逮捕、その後各地の収容所を転々とする日々を送り、一九四五年四月九日、フロッセンビュルク強制収容所において、絞首刑によって三九歳の生涯を閉じるのである。

## 二、「兄弟の家」設立

ボンヘッファーがフィンケンヴァルデで実践した神学教育の働きを特色づけるものに、「兄弟の家」(Brüderhaus)の設立がある。ボンヘッファーは牧師補研修所第一期生を送り出した後の一九三五年九月六日に、古プロイセン合同教会の評議会宛てに「『兄弟の家』設立への提議」という文書を送り、新しい形態での神学教育の提案をする。その趣旨は次のようなものであった。「わたしは、若干の若い兄弟たちと共に、一つの福音的な共同生活の場所としての『兄弟の家』を建設し、そこでわれわれは、牧師としてのキリスト者の共同生活をするために、さしあたり数年間をそのために求めようではないか、という計画を立てたのであります」。

ボンヘッファーはこの提案にあたって、五つの「考察と経験」を挙げている。まず第一に「牧師、ことに若い牧師は、互いに孤独であり、離れ離れになっているということに悩んでいます。宣教の重荷は、今日、預言者ではなく、教会の奉仕者である個々の牧師にとって、特別に重いのです。何を宣べ伝えるかという宣教の内容の点でも、また、宣教を実際に遂行する上でも、兄弟としての助けと交わりとが、必要とされています。したがって、教会闘争が進行していく中で、この奉仕の務めへの責任が真剣に考えられたところではどこでも、牧師の兄弟としての交わりができて行ったのです。これらの兄弟としての共同の交わりを始める

ためには、一層明確な形づけが必要です。この新しい課題は、ただ神学的な共同作業や時々の礼拝の交わりだけではなく、一つの・よく秩序づけられ・整えられた共同生活を形造ることによって果たされるのです。ここでボンヘッファーは神学というものが共同の営みであり、牧師職もまた孤立してなす務めではなく、本来的に共同の奉仕であることを示している。

第二に「牧師の生活の中には、何か整えられないものがあるのではないか、という漠然とした感じは、ただ戒めに対する服従という共同の訓練の実際的な試みを通してのみ、明確な助けと満足とが得られるでしょう。われわれの宣教の信用性が、われわれの生活によって、また、何がキリスト教的生活であるかということについての不明確さによって、傷つけられているということは、われわれ牧師に、新しい自覚と新しい實際的な試みをなすべき義務とを感じさせないでしょうか。このようにボンヘッファーは、信仰と生活の一致というものが宣教の信用性に関わることを挙げ、生活を整えるための共同の訓練の大切さを説いている。

第三に、「現在ならびに将来の教会闘争において、諸精神の正邪を正しく決断し見分けることのできるように神のみ言葉を宣べ伝えるために、また、どんな新しい困難な事態においても、直ちに宣教の奉仕をなする用意を整えるためには、完全に自由で、献身への訓練の行き届いた牧師の群れを必要としているのです。彼らは、その奉仕が求められるなら、どんな外的環境においても、たといその牧師という身分に伴う経済的その他の特権を放棄せねばならぬような時であっても、それに応じる用意がなければなりません。彼らは、常に兄弟の交わりから出発し、またそこへと帰って行くことができるなら、そこに、彼らの奉仕のために必要な故郷と交わりを見出すのです。そこで目標とされているのは、修道院的な隠遁の生活ではなく、外に向かつて奉仕するための、内的に最も深められた集中の生活です。これがボンヘッファーが最も重視したことであるが、何の保証もない告白教会に仕える牧師たちには、ひたすら教会のかしらなるキリストへの一層

の献身が求められており、そのためにはより緊密な「外に向かって奉仕するための、内的に最も深められた集中の生活」が必要不可欠だったのである。

第四に、ボンヘッファーは若き伝道者たちが過酷な戦いの中にいるからこそ、「その奉仕の務めにおいて離れ離れになっている牧師は、絶えず魂の避難所を必要としています。そこで牧師は、祈り・黙想・聖書研究・兄弟としての親しい語り合いなどをその内容とするキリスト教的な生活の経験を通して、牧師としてのその務めを続けるための力づけとはげましとを与えられるのです」。として、内的集中のための場所が備えられることの必要性を説いている。

それで第五に、「今日、若い牧師たちはすべて、個々の教会の奉仕の業に忙殺されており、したがってある牧師が、この奉仕を、たとい一時的にもせよ中断するという決心をするということは大変困難なことであるのはよく分かっているのですが、しかしそれにもかかわらず、この個々の教会を超えた仕事に対する若干の若い牧師たちの奉仕は、欠くことのできないことである、というのが、良心的によく検討した結果得た、われわれの見解であります」として、たとえ一時的に奉仕を中断してでも、より継続して牧師の務めを担い続けるためには、同労者同士の共同研修が必要であることを訴えているのである。

### 三、『共に生きる生活』の誕生

こうしてボンヘッファーはフィンケンヴァルデにおいて共同の研修を開始した。当初は彼の実践は非プロテスタント的な修道院的静寂主義や新たな律法主義の導入だという批判を受けることもあったが、やがてその実践は深められて思想化されていき、ついに一つの結実に至る。

ボンヘッファーは一九三八年九月から一〇月にかけて双子の妹ザビーネとその夫ゲオルグのライブホルツ



夫妻の家に滞在し、僅か四週間の間に一冊の本書を書き上げた。その本は、翌一九三九年にカイザー出版社から出版されると、大きな反響を呼び起こし、ドイツのみならず、広くヨーロッパの教会に大きな影響を与えるに至った。それがこの「兄弟の家」での共同生活の中から生み出された名著、『共に生きる生活』(Gemeinsames Leben)<sup>10</sup>であった。

### 第三章 ハンス・ヨアヒム・イーヴァントの場合

#### 一、イーヴァントとブレスタウ牧師研修所

次にハンス・ヨアヒム・イーヴァント(Hans Joachim Iwand)を取り上げる。<sup>11</sup>イーヴァントは一八九九年に東プロイセン(現ポーランド)のブレスラウの牧師家庭に生まれ、ルター派の伝統に立つ牧師、神学者として活躍した人物として知られる。

イーヴァントはナチ政権成立前から、ナチ党やドイツ・キリスト者運動に批判的な姿勢を持っていたためケーニヒスベルクやリガ大学をはじめとするいくつかの神学教育機関での教授職を追われ、東プロイセンにおける告白教会闘争に尽力するようになったが、やがて一九三五年、三五歳のときにボンヘッファー同様、古プロイセンの告白教会が設置した牧師補研修所の一つであるブレスタウの研修所の所長として妻子と共に移り住み、第一期の研修生たち一六名とともに奉仕を開始した。しかし一九三七年五月には東プロイセンからの退去を命じられ、その後、ドルトムントに移り、その間にはイーヴァントのみならず研修生ごと全員の逮捕をも経験し、ついに実質二年あまりの活動の後、一九三八年春には研修所が解散に追い込まれるに至るのである。

その後、何度かの逮捕と拘束を経て、一九三九年にドルトムントの聖マリヤ教会の牧師に就任し、敗戦まで激しい空襲に耐えながら奉仕を続けると、終戦の一九四五年にはゲッティンゲン大学神学部教授に就任し、やがて一九四七年からは『ゲッティンゲン説教黙想』の主任編集者となって、告白教会の戦いから生み出された「神の言葉の神学」に立つ説教黙想運動の中心的な担い手として奉仕するようになった。その後、一九五二年にはボン大学に移って教義学を講じるかたわら、平和活動やルター派・改革派の神学的一致のための作業に尽力し、一九六〇年に突然の心臓発作によって六〇歳で亡くなっている。

## 二、「説教学講義」を読む

イーヴァントが牧師補研修所で行った講義の中から、一九三七年に行われた「説教学講義」を取り上げておきたい。<sup>12</sup>これは当時の研修生たちがイーヴァントの講義を聴き取ったノートに基づいて後日編纂、出版されたもので、講義の際にはイーヴァントは手元に十分な蔵書を置くこともできない中、研修生たちを前に原稿も持たずに自由に語ったと言われている歴史的な講義の記録である。

本書について、訳者の加藤常昭氏が次のような印象を記している。「イーヴァントは実践神学専門のひとではありません。説教学の教授が大学で説教するのとはずいぶん様子が違います。ナチとの厳しい戦いのなかにありました。既にバルメン宣言を公にし、それを掲げての戦いでした。イーヴァントは、それは何よりも説教による戦いであると理解しておりました。説教学者ではなかったでしょうが、〈説教すること〉と〈神学すること〉とがひとつになっていたひとでした。…何の準備もないところで、実際に説教の言葉を体得して、告白教会の戦いに加わる若い人びとに、このころのうちにある熱い思いを吐露するような講義は、しかし、整った説教学教科書よりもわれわれのここを打ちます」<sup>13</sup>。

### 三、説教者の存在と使命

本書において、まずイーヴァントはこの世界に説教者が立てられることの根源的な意味について次のように論じる。「神が使者を必要となさるのはなぜかということである。神が使者を必要とされるのは、そうでもしなければ、ご自身の言葉を任せきりにできる者を得られなかったからである。∴神の使者たちが世界中に存在することをやめたとすれば、その瞬間、神の言葉は存在することがなくなるであらう。神の言葉は世界の本質にも、世界の現実存在にも属するものではないからである。∴教会の存在は神のなさる奇跡のわざなのである。∴神は過ち多く、弱々しい人間に、ご自身の言葉を委ねてくださった。教会はそれによって生きている。わたしの言葉を得た者は、正しくそれを説教せよ（エレミヤ二三・二八）。神の言葉を得ていない者は説教することができない<sup>14</sup>」。このように、イーヴァントは神の言葉がこの世界に本来属するものでなく、神の外からの声として語られるものであり、その言葉を宣べ伝える教会は「神のなさる奇跡」であり、この言葉に仕えるために神が特別に召されたというところに説教者の存在の根源的な意味を置くのである。

またイーヴァントは「われわれが説教を学ぶとき、誰にでも通用するような説教論を展開することは、私には不可能である。そうではなくて私が問いたいの<sup>15</sup>は次のことである。われわれが今生きている、まことに明確な姿を見せているこの世界に對抗して、われわれをして語らしめる神の言葉に基づいて、今われわれは何を説教しなければならないのであろうか。∴宣教の言葉を語る使命は、イエス・キリストを告げること、この方にのみ神の唯一の啓示が起こっていることを告げることにある。∴説教の言葉を語る使命は、他のすべての神を証しする試みに対して、この啓示こそ比類なきことが明らかにすることにある<sup>15</sup>」として説教の使命を語る。説教とは宗教的言説を語ることでなく、生ける主イエス・キリストの到来を告げ知ら

せることにあるのであって、そのメッセージは根本的にこの世の事柄から異なるものである。

それで「たとえ今日の世界が信仰、啓示、神、創造について声高に語り、諸君がこのことを一瞥することがあるとしても、それを自分の霊的なまなざしで、しっかりと見据えるといい。そうすれば、われわれに与えられている使命が、その世界のなかに、今述べたような排他性をはっきりさせながら、神の言葉、つまりイエス・キリストを宣べ伝えることであることを明確に意識するようになるであらう」<sup>16</sup>として、当時のドイツ・キリスト者たちが喧伝していた民族主義的に変質し、キリストから切り離された創造の秩序の神学を批判しながら、キリスト教宣教の中心点を明示している。それゆえこの使命から説教者は己れに委ねられた務めをバルメン宣言第一項の線に沿って次のように受け取るのである。「ここ十年の間に、またバルメンにおいて驚くべき仕方で明らかにされたのは、このみ言葉に耳を傾けることによって人間は救いを得るということであった。教会のすべての秩序が崩れても、われわれは説教しなければならない」<sup>17</sup>。

#### 四、二つの限界線の間で

さらにイーヴァントは「説教の使命を果たすとき、われわれは二つの限界線の間にある。キリストが甦っておられないならば、説教することはできないし、神が聖霊を与えてくださらなければ、説教は何の成果も挙げ得ない。われわれは復活祭と聖霊降臨祭の間を走る。しかし、われわれが頼りにするのは、復活も聖霊降臨も力を持つようになるのは神によるということである」<sup>18</sup>と語って、説教者が告げ知らせる使信はキリストの復活によって成し遂げられた救いの福音であり、同時にそれによって人を救うのは聖霊の御業であることを示す。

ここでイーヴァントは「復活祭と聖霊降臨祭の間を走る」という理解が説教者の大切な自覚を作ることを

強調しつつ、次のように言う。「説教の働きは、またきわめて明確な仕事である。きわめて明確に念入りになされる仕事、熱心に、精進しつつ果たされる仕事である。すべてのことをなし終えたところで、われわれは手を合わせて、神がその仕事を祝福してくださるようにと祈る。諸君が、そのあとになお牧師らしい手練手管で教会員をまるめこむようなことをしないでいただきたい！すべては神の靈の働きにかかっている。そのことを信頼して、われわれはひたすらわれわれの仕事、つまり、*ministerium verbi divini*（神の言葉の業に仕えること）をすべきである」。<sup>19</sup>「諸君と諸君が働く教会との間に立っておられるのは神である――諸君がそこに定められている限界を尊重するならば、祝福と慰めがそこにある。だが、この限界を乗り越えようとするれば、それは鋭い剣となるであろう。諸君が人びとの魂を支配し始めるや否や、神の剣のもとに自ら赴くことになる。諸君の宣教の言葉を聴いて人びとが神を見出すようになるのはどのようにしてか、それは常に諸君にとって解きたい謎であり続ける。それは他の人びとにとって謎であるのと変わりがない。それは依然として神の祝福であり続ける。そこでわれわれが現実のこととして知るのは、神が信仰を造り、人間を変えてくださるのであり、私はその道具でしかないということである。いったい *bonjour*（僕）であるとは、どういうことであろうか。それは、誠実に神学的に説教するということである。ここで神学というのは、説教者が僕たる自分の位置をよくわきまえながらひたすら努力するということ以外の何事でもない。正しい宣教のための労苦である」。<sup>20</sup>

イーヴァントがこの講義を行っていたまさにその同じ時、ナチ国家は一人の独裁者を神に並ぶ座に祭り上げ、その言葉で人々の心を支配していた。しかしそのような中において牧師は説教壇からいかなる言葉を語るのか。この言葉を獲得することこそが神学の務めだとイーヴァントは語る。我々が神学を学ぶことは、神の言葉を語るに相応しく自らが成長させられていくことであり、同時に神の言葉の前に自らが謙遜にさせら

れていく営みである。「われわれが神の言葉によって成長し、なるべき者になることがなければ、われわれの将来はないであろう。説教者自身が途上にあり、新しいものを見つめ、見出し、自分が見出したものは背後に置くという運動を続けていなければならないほど、それだけ役に立つ説教をすることができ<sup>21</sup>」と言われ、また「諸君が説教者として働きを始めるときに本来に始めたと言えることが何より大切なのである。偉い人間として認められるようになったときではない。…諸君が日曜日に自分をやたらに高く駆り立てるようなことをすれば、それは全く間違っている。成長したいと思うならば、今立っているところから始める勇氣を持たなければなら<sup>22</sup>ない」と言われるとおりである。

## 五、終末に向かう説教者

最後に、告白教会の戦いの中で説教者として遣わされていくとする若き牧師補たちに向けて、イーヴァントが決断を迫るようにしながら語った言葉を聞いておきたい。「諸君が説教するのは今日である。神の今日である！今、諸君は宣教の言葉を語らなければならない！…諸君が今日もなお教会員に説教することが許されるならば、感謝してほしい。そのようなことをわれわれはここ何年もの間体験してきた。しかもこの一切を否定しきろうとする敵に直接向かい合うぎりぎりのところ、ここです、真実の意味での神の証人になるのである。そこでは、われわれは永遠の厳しさに直面しつつ立っている。われわれが永遠なるものを打ち立てるというようなことではない。そうではなくて、われわれがこの世によって死の境界線にまで押しつけられてしまうというのである。そこでは確かにわれわれは自分が語る日のためにのみ立っている」。

まさしく彼らが遣わされていく先には戦いの現実があり、そこでは「われわれがこの世によって死の境界線にまで押しつけられてしまうという」という状況が待ち受けていた。しかし「そこではまるでその日が最

後の日となり得るかのように、この日がわれわれにとって鮮やかなものとなってくる。イエスの宣教の働きにおいては、その最初から、終焉の影が射していた。まさしく世がわれわれを脅かすことによって、世はわれわれに、この今日という日をまったく神の言葉によって満たすことを強いる。それは今日という日における神の声になることを強いる。このような賜物が与えられているとき、初めてわれわれがはっきり見るようになるのは、神がこの世が与える困窮のなかから喜びを呼び起こしてくださるということである。この喜びが支えてくれるからこそ、この世の苦しみは、来たりつつある栄光に比べれば取るに足りないものとなるのである」とイーヴァントは語る。説教者が苦しみの中にあってもこの務めに与ることができるのは、終末の光から照り返された主イエスにある希望の光の中に自らも立つことが許されているからなのである。

#### 第四章 我々が学ぶべきこと

今日の我々が置かれている状況と、かつての告白教会における牧師補研修所の状況には確かに多くの点で違いがある。しかしその上でなお、我々の営みと彼らの営みとがともに「神学」であるがゆえに、そこには様々な違いを超えてなお共有されているものがあるのも確かなことであろう。そこで最後に、我々が告白教会闘争の神学教育、伝道者養成の実際から学び取ることでできるいくつかの点を挙げておきたい。

##### 一、共同で学ぶ

第一のことは「共同で学ぶ」ということの大切さである。告白教会の目指した神学教育の形態は、一貫して「共同で学ぶ」ことに重きを置くものであった。それは教会を取り巻く外的状況の厳しさと、教会内部の分裂状態の中で、伝道者たちが孤立してしまうことのないようにという配慮でもあったが、より事柄に即し

ていえば「神学」が教会の学であるがゆえに、それが本質的に共同的な性格を持っていることを正しく捉えたものであったと言えよう。我々の伝道者としての学びも、一人孤立して営むものでもなければ、誰かと競い合うようなものでもない。共に主に仕え、共に教会を建て上げるために奉仕する「僕仲間」として、我々は互いを必要としているのである。このことは神学校という場だけでなく、むしろ教会に遣わされてからの日々においてこそ重い意味を持つことになる。伝道の現場に身を置く日々においてこそ、務めの本質に沿って学ぶ交わりをこれからも大切にしてほしいと思う。

## 二、自立して学ぶ

第二のことは「自立して学ぶ」ということの大切さである。第一の「共同で学ぶ」とことと相反することのようであるが、これもまた神学という営みを続けていく上で欠かすことのできないものであろう。ドイツ告白教会闘争の時代は、教会が国家と鋭く向き合う時代であったが、教会といってもすべてが同じ所に立ったわけではなかった。その点でいえばドイツ告白教会闘争は、对国家の闘争である以上に、真実な教会とは何かを巡る戦いであったと言えるのである。

帝国教会に属する大多数の教会、ドイツ・キリスト者と呼ばれる牧師、神学者たちは自ら進んで国家に從属する立場を取った。その場合、ドイツの教会が古くからの領邦教会制度のもとで国教會的品格を色濃く帯びていたことは小さな事ではない。国家との関わり方がそのまま自分たちの地位や生活環境を左右することになりかねなかったのであり、保身に走り、信仰の節を曲げた牧師たちや神学者たちがいたのも事実であった。<sup>24</sup>その一方で告白教会に連なる牧師たち、神学生たちは整えられた環境や潤沢な資財を持つ大学神学部を追われて、殆どの場合が貧相な環境の下で学ぶことを余儀なくされた。しかしそのような国家から自立した



場でなされた神学の営みでなかったなら、国家と対峙する決断的な信仰と実践は生み出されなかったのではないか。

我々の学びと奉仕も、神の御前にあって自立したものとして保たれる必要がある。そこではいつも誰かの助けや支え、保証された身分や整えられた環境に依存した姿勢や、責任を引き受けることを回避するような姿勢をとり続けることはできない。主なる神にあっての精神の自由、良心の自由がきちんと確保されて学ぶためには、信仰的にも学問的にも、また経済的にも自立した環境を整えることが大切である。それが教会の神学にとって決定的な意味を持つのであり、自覚的に自分自身の学びのテーマを見据え、考え続けていく修練は欠かすことができない。

### 三、問題意識をもつて学ぶ

そして第三のことは「問題意識をもつて学ぶ」ということの大切さである。告白教会の戦いは、皆が当たり前のように一つの方向に向かって進んでいく中で、御言葉に立つがゆえに、時代の流れに抗うようにして立った決断的な信仰のあらわれであったが、そのような姿勢に立つことができたのは、向き合う相手の本質をしっかりと見極める問題意識と洞察力、そしてそれに基づいて決断し行動する力を備えていたからではないだろうか。

我々が神学校の三年間で、聖書を学び、教理を学び、歴史を学び、実践を学ぶのも、それによって様々な知識を蓄積すること以上に、神学的・教会的思考を修練し、それをもって事柄の本質を洞察し、それに基づいて事柄を正しく判断する視点を養うためであると言えよう。そこでは絶えず「なぜ」という問題意識をもって神を問い、己れを問い、世界を問うことが必要なのである。

## おわりに

ボンヘッファー、イーヴァントとともに本来取り上げられるべき人物に、カール・バルトがいる。バルトもまたドイツ告白教会闘争の戦いを担った中心人物の一人だが、バルトはドイツ人でなくスイス人であり、牧師補研修所ではなく大学で神学し続けたという点で、彼らとは違いがあるのも事実であるが、しかしバルトがドイツ告白教会闘争の中心的な担い手であったことは間違いないことであり、さらにまた若き日のザーフテンヴィルでの牧会時代も、ゲッティンゲン、ミュンスター、ボンの各大学での教授時代も、そして後にヒトラーへの忠誠宣誓を拒否してボンを追われたスイスのバーゼルでの教授時代も、バルト自身の自覚においては一貫して「牧師たちのための神学」を続けていたのである。<sup>25</sup>

今日、我々はポスト・モダンの時代状況のもとで、多様化する靈的需要に応え得る働き人となることが求められ、そのような働き人を養成する神学校を取り巻く環境も大きな変化を求められている。しかしながら、だからこそ我々にはボンヘッファーの言う「外的奉仕のための内的集中」が一層求められているのではないだろうか。本当に必要な一つのことを獲得することのないままに、あるいはその一つのことを見失ったままに、多くの必要に振り回され、自分を見失い、時代の中に吞み込まれていくことにならないために、我々は時代の波風の中にあってじっくりと腰を据え、神学的な思索を重ね、真実な言葉を獲得していく営みを続けて行かなくてはならない。この営みの延長線上にこそ、イーヴァントの言う「真実の意味での神の証人」としての奉仕が与えられるのであり、神の国のために喜んで働くしもべとなっていくことができるのだと確信するのである。

## 註

1 本稿は、二〇一一年二月八日に開催された東京基督神学校学生会ビスガ会主催の講演会の講演原稿に加筆修正し、論文として整えたものである。

2 ドイツ告白教会闘争の全体像についてはM・ガイガー『ドイツ教会闘争』佐々木悟史、魚住昌良訳（日本基督教団出版局、一九七一年）、K・クビッシュ『ドイツ教会闘争への道』兩宮栄一訳（新教出版社、一九六七年）、宮田光雄『十字架とハーケンクロイツ』（新教出版社、二〇〇〇年）、H・E・テート『ヒトラー政権の共犯者、犠牲者、反対者』《第三帝国》におけるプロテスタント神学と教会の《内面史》のために」宮田光雄、佐藤司郎、山崎和明訳（創文社、二〇〇四年）等を参照。またこの時代を背景に描かれた有名な小説に、オットー・ブルーダー『嵐の中の教会』森平太訳（新教出版社、一九六〇年）がある。

3 バルメンの第一回告白教会会議の概要とその決議内容については、兩宮栄一『バルメン宣言研究ドイツ教会闘争史序説』（日本基督教団出版局、一九七五年）を参照。バルメン宣言の内容については、朝岡勝『「バルメン宣言」を読むー告白に生きる信仰』（いのちのことば社、二〇一一年）を参照。

4 兩宮栄一、前掲書、二二八頁。

5 ダーレムの第二回告白教会会議の概要については、兩宮栄一『ドイツ教会闘争の展開』（日本基督教団出版局、一九八〇年）を参照。

6 M・ガイガー、前掲書、五八～五九頁。

7 ボンヘッファーについては多くの優れた著作があるが、簡潔に学べるものとしては、森平太『新版服

従と抵抗への道 ボンッファアの生涯』(新教出版社、二〇〇四年)、村上伸『人と思想 ボンヘッファア』(清水書院、一九九一年)。その生涯と思想についてはE・ベートゲ『ボンヘッファア伝ⅠⅣ』村上伸、兩宮栄一、森野善右衛門訳(新教出版社、一九七三年～一九七四年)、『ボンヘッファア選集』全九巻、兩宮他訳(新教出版社、一九六二年～一九六八年)、ボンヘッファアの神学の全体像については、鈴木正三『キリストの現実に生きてナチズムと戦い抜いたボンヘッファア神学の全体像』(新教出版社、二〇〇六年)を参照。特にフィンケンヴァルデ時代の詳細はベートゲ『ボンヘッファア伝』Ⅱ、Ⅲを参照。

8 『服従』の翻訳は『キリストに従う』として選集Ⅲ(のちに単行本でも発行)に、『倫理』は『現代キリスト教倫理』としてボンヘッファア選集Ⅳに、また説教と牧会についての講義ノートは一冊にまとめられて、D・ボンヘッファア『説教と牧会』森野善右衛門訳(新教出版社、一九七五年)として出版されている。

9 D・ボンヘッファア「兄弟の家設立への提議」『ボンヘッファア選集Ⅵ告白教会と世界教会』森野善右衛門訳(新教出版社、一九六八年)二二三～二一九頁。

10 D・ボンヘッファア『共に生きる生活』森野善右衛門訳(新教出版社、一九七五年)。

11 イーヴァントの著作の邦訳としては、『ルターの信仰論』竹原創一訳(日本基督教団出版局、一九八二年)、『キリスト論序説』鈴木和男訳(日本基督教団出版局、二〇〇八年)などがある。イーヴァントの説教黙想については『約束の陽は昇る ゲッティンゲン説教黙想』鈴木和男訳(日本基督教団出版局、二〇〇一年)、また加藤常昭編『説教黙想集成Ⅰ』(教文館、二〇〇八年)に詳しい解説と黙想の実際が収められている。説教集としては『清き心をつくり給え H・J・イーヴァント説教集』出村彰訳(日

本基督教団出版局、一九八〇年）。なお次に取り上げる説教学講義を含むイーヴァント著作選全六巻が  
新教出版社から順次刊行中。

12 H・j・イーヴァント『説教学講義 イーヴァント著作選一』加藤常昭訳（新教出版社、二〇一〇年）

13 同上、二四五頁の訳者あとがき。

14 同上、一〇頁。

15 同上、一四頁。

16 同上、一五頁。

17 同上、一六頁。

18 同上、二六頁。

19 同上、二八頁。

20 同上、三〇頁。

21 同上、四五頁。

22 同上、四六頁。

23 同上、五二頁。

24 戦後もドイツ神学界の重鎮であったゲアハルト・キッテル、パウル・アルトハウス、エマヌエル・ヒル  
シュといった神学者たちのナチ時代の姿については、R・P・エリクセン『第三帝国と宗教 ヒトラー  
を支持した神学者たち』古賀敬太、木部尚志、久保田浩訳（風行社、二〇〇〇年）に詳しい。これと似  
たような構図は日本の神学界においても見られた。

25 バルトは最晩年のラジオインタビューで生涯を振り返りながら、「わたしの神学は、すべてこれ、根本

において牧師たちのための神学なのです」と語っている。カール・バルト『最後の証し』小塩節、野口  
薫訳（新教出版社、一九七三年）二五頁。